

思惑と広がり の 1990 年代

▶自転車の発祥欧州でのツーリングやロードレース文化から転じて、米国西海岸発の BMX & Beach Cruiser からの MTB (ATB) が世界を席卷した 1990 年代。日本での私的な実質体感 MTB ブーム (バブル?) は概ね 1988 年から 1998 年の 10 年間だったように思います。特に 1990 年代は MTB を基軸に自転車界が動きました。当社もそれまでの欧州ロードレーサーから GT/RITCHEY/KONA などの MTB がビジネスの主人公になり、カスタムパーツも MTB 系が花盛り。その後 MTB ブームが去って間もなくロードバイクブーム・・となった訳ですが、この 1990 年代の出来事が今日に強く影響しているようにも感じられます。特にこの時代の米国のブランディングテクニックと量産国探しの要素が、古典的な欧州ブランドをほぼ全て深部に飲み込んだキッカケになったと言えるのではないのでしょうか。



▲ 1988 年のとある展示会での当社ブースでは手前から RITCHEY 自ら制作したアンナプランナ・東洋フレームが製作した GT の初代アバランチ、ツール優勝のイタリア BATTAGLIN・ツール優勝のイタリア PINARELLO・カーボンチューブ 9 本を使用したフランスの VITUS・イタリアの芸術的作品 PALETTI が展示されています。この場面から既に手前に来ているのは 2 台のマウンテンバイク、でした。



◀ 1993 年の展示会ではメインステージに台湾生産となった GT のトップモデル Team RTs に珍しい CONTROL TECH のサスペンションフォークが搭載されたショーモデルが展示されています。展示されたカスタムパーツ類も殆どがアメリカブランドの MTB 系の商品でした。ロード系車体では辛うじて RITCHEY の ROAD LOGIC フレームが展示されていたのみです。



◀ 1996 年の展示会では国内生産に拘った東洋フレーム製のブランドがメインとなって来ます。東洋フレームはアメリカの MTB 発祥ブランドの多くの初期モデルを手掛けた量産可能な名工房でした。1980 年代当時、発祥となるような多くの MTB ブランドが生産を依頼しに工房を訪れたのではないかと云うくらいの基地でした。



◀ 国内レースも MTB が殆どでしたが、1997 年のレース会場では「shimano airlines DOWNHILL PROJECT 2000」と銘打ってエア変速システムを組み込んだ実走テストバイクが参加していました。MTB はダウンヒルブームに傾倒しサスペンションの研究が盛んとなって価格も高騰していきます。このようなテストもされていたように将来への投資がなされていました。

▶ 米国 (北米・カナダ) は MTB の騒りの中で都会でのロードクリテリウムレースを毎週末頻繁に行いロードを盛り上げていきます。そうして欧州ブランドも傘下に収めロードバイクが流行します。追うようにシクロクロスも巻き込んでいき、次の一手としてグラベルへと傾れ込んだと言えるでしょう。

▶ 自転車レースの視聴や、機材素材は勿論のこと、車体商品のマーケット手法は競い合い、現実の多くの一般サイクリストとの乖離が進み、世間のウンザリムードをグラベルで巻き返してきた感がありますが、これからも米国主導に埋没し続けるのでしょうか・・・。



◀ 「TOYO OTAKE SAN-ESU」というチームを作り活動をしていました。大竹雅一さんは言わずと知れた日本人初のアメリカ NORBA レースで表彰台に立った MTB レジェンド。シマノで XT の開発も担当されていた実績があり、OTAKE ブランドのフレームを東洋フレームで製作され、レース活動では写真のようにサポートに徹しておられました。



◀ TOYO ブランドでは斬新な独自の設計を幾度も実走テストしていました。写真は販売モデルまでは至らなかったリアサス機能が搭載されたもの。スチールのしなりを活かしたフレームですが世界と言われた東洋フレームの精度なくして作れない構造です。レースはそのままテストの場でした。その後 2000 年に TESTACH ブランドを作り TESTACH-Racing として活動します。錚々たるメンバーが揃ったロード/シクロクロス/MTB のチームでした。



◀ 1998 年はブランド名を「TOYO TESTACH」として東洋フレーム製であることの価値を記していました。この写真のモデルもプロトタイプであり、形状や素材含めて、レースで勝つことを目的に活動をしていました。商品は全てフィードバックから生まれたものでした。まだディスクブレーキには至っていません。



▲ 2000 年、TESTACH ブランドとして商品化した MTB のトップモデル「プライズ」。コロンバスの最先端スチールチューブ FOCO と US メイドのチタンバックをベンドさせたディスクブレーキモデルです。1600g 程度と軽量でヘッドもインテグラル。CANE CREEK が特許を持ち日本の TANGE SEIKI が開発生産をしたことから、世間で当然のシステムとなって行きました。この頃には TESTACH と MIZUNO が共同開発してロード用のインテグラル前提でのカーボンフォークも作りました。

次ページへ続く →